

話しことばの獲得に関する臨床的考察

—人的環境について—

池 山 和 子

(1985年10月15日 受理)

A clinical study of speech acquisition

—about social surroundings—

Kazuko IKEYAMA

はじめに

子どもが話しことばを獲得するためには、子ども自身が備えていなければならない条件と、環境側に必要な要因の2つがそろふことが必要だという点は現代では異論のないところと思われる。このうち、話しことばそのものに関する研究あるいは子ども側の条件に関する研究はかなり詳細な点まで積み上げられてきているように思われる。これに対し、環境側の要因とそれが発達に及ぼす影響については十分な検討がなされていないように思う。

言語治療領域の中には、話しことばコミュニケーションをとらえる2つの見方がある。1つは現象を輪切りして見る見方で、送り手と受け手の話しことばのやりとり、あるいは送り手と受け手の間に想定することのできる音波の流れを含むコミュニケーションの鎖を問題にする。やりとりの不備あるいは回路中の切れ目をつきとめ修復することが臨床活動の内容となる。もう1つの見方は発達的な見方で、子どもが話しことばコミュニケーションを獲得していく過程を観察する。正常な母国語コミュニケーションの獲得に成功した子どもとどうも獲得することのできなかった子どもの生育過程を環境ぐるみ比較検討することによって、ことばの獲得に必要な条件や要因を知ることができる。臨床的にはその子どもに欠けていた要因を発見しそれを補い与えることによって話しことばの獲得を期することができる。

Johnson, W. は吃りの診断起因説や、ことばの問題箱の概念を提唱したが、これは子どものことばを異常とみなすこと、あるいは疑いをもって見ること自体がことばの環境として好ましくないものであることが、指摘されていると言えよう。Johnson の考え方の特徴として子どもの話しことばと、コミュニケーションの様相を子どもの実際の生活の中でとらえている点がある。臨床活動それ自体も子どもの生活の一部であり、臨床家と子どものコミュニケーションも対象の一部として問題とせざるを得ない。筆者はこのような Johnson の考え方を基点として臨床活動を実施し子どもが

ことばを獲得していく過程をいくつか観察することができた。その結果ことばの獲得に及ぼす人的環境の重要性を知ることができたのでこれを報告したい。

臨床活動

A) 活動の基本的な形態と方針：物的、人的な条件から、子ども、母親、臨床家の3者が同一の部屋で同じ時間を過ごす形になった。即ち子どもと臨床家の活動を母親が部屋の一隅で眺めて過ごすこともあり、母親と臨床家が話をしているあいだ子どもが傍でひとり人で遊んでいるということもある。子どもの行動について当室では指示、叱責はしないよう母親に伝えたが、3者がその場の状況に応じて自由に働きかけあうことができる。このような形態において、母親と子どもの自然な関係のあり方をしばしば観察することができ、また子どもに対する望ましい接し方を母親にその場で具体的に説明できるという点では便利であった。子どもが遊びながら母親の存在を気にしたり、母親と臨床家間に交わされる子どもに関する話の内容を子どもが聞きとるといった点もあった。父親、きょうだいその他の関係者が同伴した場合も殆どの場合が同室で過ごした。

基本的な方針としては、まず何よりも子どもが自由にのびのびと楽しい時間を過ごすということをも第1の目標と考えた。これはこのような状態が子どもの真の姿を知るのに役立つと考えたからである。具体的に何をするかは子どもによって異なり、子どもの様子を見ながら適宜変更していった。この上で対象となっている子どものことばの獲得のために意図的に用意することが必要、あるいは役立つと判断された活動を用意した。

B) 事例：具体例として3つの事例を挙げる。ここに挙げた事例はほぼ同時期のもので、終結後すでに10年に近い年月が経っている。事例Aは最近の様子がわかっているが、他の2事例については連絡先が不明で最近の様子を知ることはできなかった。

事例A：初診時3歳4カ月の女兒で、父母と3歳年長の姉との4人家族である。

主訴：会話ができない。言えることばは赤ちゃんことばが10語くらい。片言のみで続けて言うことができない。

生育暦：予定より2週間遅れて出産。お坐り、這い這い、歩行などの発達には特に問題らしいことはなかった。赤ちゃんの時はお話をあまりしない、とても大人しい子どもであった。泣くのは大声であったが、いるんだろうかと思うくらいひとりで大人しくしていた。姉とはずい分違って手のかからない子どもであった。一歳ころからバンバン、マンマ、ママなど言い始めたが、その後あまり変化がなかった。一歳6カ月くらいで昼間のおしめがとれた。赤ちゃんのころはよだれをあまり出さなかったが歯が生えた後、2歳ころからよく出すようになった。人見知りはない方で誰にでもついていく。熱性のけいれんを起こしたことがある。指さしは2歳ころから始めた。

初診時の様子：(母親からの情報によると)母親の言うことはたいていわかっている。話をしたい気持はあって身振や動作で表現する。勘を働かせていることもよくある。食事に時間がかかる。歯

が悪くかむことは苦手。水洗トイレがきれい。デパートなどではトイレの近くへ行くのも嫌がる。水洗の音が嫌いだと思われる。今でも大便のしつけができていない。姉も遅くまでかかった。全体に無口。1人でTVを見ている時、雰囲気まきこまれ声を出しているが人がいると声が小さくなる。絵本で、母親が嫌になるくらい何回も指さして言わせることがある。本人は何も言わない。ことばの言い直しをさせると嫌がる。母親が遊びの相手をしようとしても嫌がることもある。一番好きなのは姉。近所の子どもたちとままごと遊び。年下で赤ちゃん役をさせられ反発はしているらしいが遊んでいる。言語能力発達質問紙で基礎3歳、理解2歳半、表現1歳レベルの項目はできている。(当室での様子)「空をとぶものはどれ?」という質問に答えられる。同程度の質問で答えられないものもある。絵を見てその物の名まえを日本語にはなっていないがそれらしい抑揚をつけて声を出す。身振りをしてみせることもある。ことばになっているものとしてカーシアン、バイバイ、ブー(自動車)、ニャンニャン、テエビ(TV)、レーゾーコ、キイン(きりん)が得られた。構音は未熟で音節も分化していない。ぬいぐるみ、シール、壁の写真の3つを同じ“パンダ”であると人に知らせる。できあがったものをほめると声をあげて喜び、母親に知らせる。時々臨床家の顔を見てにっこりする。ストローを唇で支えることが難しい。吹くことに夢中になるとよだれをたらす。電話の玩具で話をしているように「アーウー」と声を出す。

経過：初めの3年は原則として2週間あるいは3週間に一回通室してもらい、遊戯療法的なアプローチを行った。以下入園までの様子を母親からの情報と当室での様子に分けて記録から抜粋する。

	母親の報告	当室での様子
初診から2W	大人をからかったり、驚かしたりして喜ぶようになった。家では臨床時よりいくらか声大きい。	自分から室内の玩具を次々に手にとって遊ぶ。動作に合った擬音や手にとった物の名などを、傍らから声かけすると同じ抑揚の声を出してオーム返す。
	(母親への指導) ことばを教えようと言わせるのではなく、臨床場面でのように子どもが自分から自然にオーム返しをするようにことばをかけることを心がけると良い。	
前回より3W	通室するようになって何ともいえず明かなくなってきた。来ることをとても喜んでいる。家でも伝えたことは身振で表現することが多い。A児の相手をする姉が嫉妬していじめる。	臨床家の方からの遊びを発展させるような働きかけが少ないと、遊びが次々変化する。よだれが多い。
2W	コーヒーが欲しい時、A児がことばで要求しても母にわからない。コップやビンを持ってくることよって通ずる。	前回までに比べ遊びながら室外の物音を気にすることなく遊びに集中するようになった。
	ことばの一般的指導法について書かれたパンフレット“ことばの学習”を渡す。	
2W	パンフレットを読んで、父母ともにとても良い勉強になった。父親の考え方が変わった。母親は他人が聞けばわざとらしくらい1つの単語をくり返し聞かせるように心がけている。	ことばが2つつながる。(シェンシェイ、イイ?)。A児の言ったと思われることばを臨床家がくり返すとすぐまたそれを初めの時より明瞭な構音でオーム返す。

- 1
2
W
L
- お菓子を買い時でも「先生（臨床家）の分」と言っ
てとり分ける。ここをととても重大に考えている。
- 会話の中で2つの語がつながっていることが時々あ
る。知っている物の名まえは不明瞭でも声を出して
何か言おうとする。息を強く吹くとよだれがとぶ。
-
- 2
W
- 人を見ると誰にでも自分から話しかけるようになっ
た。おしゃべりの量が増えた。他人からもそう言わ
れる。母親にはたいてい意味が通じ、通ずることが
動機づけになっていると思う。通じなくてかんしゃ
くを起こすことがずいぶん減った。最近おぼえが早
い。以前は何回も何回も言ってやっと覚えたが今は
2, 3回言えば覚える。家でも母のことばの語尾を
くり返す。近所にことばのことをからかう子どもが
いる。食べ残したあめの袋を臨床家に持っていくと
言っていて忘れてきた。
- 臨床家がカセットを操作しているのをじっと見てい
て、後で自分でボタンを操作してカセットをとり出
す。ままごとと道具を1つつ取り出しながら臨床家
に名まえを言わせる。玉ねぎの皮をむく手つきをし
てみたり、キュウリを注射器のようなかっこうで片
腕にあてる。(家の注射器の玩具とかかっこうがよく
似ている。) 電話の玩具で簡単な問いかけをすると
とても喜んで返事をする。問いかけが難しいとす
とその場を離れる。絵本（こぐまちゃん）を見せ
ると臨床家の指をつかんで絵本の上に押しつけその部
分の名を言わせる。
-
- 2
W
- 「ママ、ダメ」など2語文が出るようになった。鹿
児島でいう“いなば”になった。友だちとの間でこ
とばが相手に通じないとかんしゃくを起こしてけん
かになる。5までそれらしい発音で数を数えるよう
になった。3は数としてわかっている。デパートの
トイレを使うことができるようになった。
- こぐまちゃん絵本を自分で出して指さし、臨床家の顔
を見る。粘土を切ったりお湯をわかしてお茶を入れ
る等のままごとの動作を楽しむ。自分がことばを言
っても相手にそのことばが通じないことがあるとい
う不安が感じられる。自信のあることばは大きな声
ではっきり言う。よだれを出さずに息を長く吹く。
夢中になっている時によだれをたらすことがある。
-
- 2
W
- ままごとで赤ちゃん役をとっていかにもそれらしく
甘えたりする。自分から指さして物の名を尋ねるこ
とがある。仲間はずれにされるとそこにあったもの
をこわし、ありったけの悪口を言って逃げる。こと
ばは、ある程度つきあった人、友だちにはけっこう
通じる。順調に伸びている。
- お店やさんごっこ、A児が店の人になりお金の受け
渡し、店員がものを書きつける仕種などのまねをし
て遊ぶ。
-
- 1
M
2
W
- ここ1ヵ月ほどのあいだに2語文になった。2語文
くらいの文なら家族の言うことばをまねる。よくオ
ーム返しをする。一週間ほど前からトイレがきちん
とできるようになった。けんかの時自己主張をする
ようになり、泣いて逃げてくることをしなくなった。
休み中も大学へ行くのを楽しみにしていて何かとい
うと「先生、先生」と先生にひっかけていた。
- 2語文で話すことが多い。数字を数えるような声を出
しながらメチャクチャ文字を書く。ことばを話す
ことそのものを得意に感じているようにしゃべる。
「お帰り」と言うのと「イヤ、イヤベー」と答える。臨
床家に直接でなく、母親に怒りを向ける。よだれを
時々たらす。Jargonをしゃべる。休み中海へ行っ
た時の出来事を母に助けられながら身振り動作で伝
える。
-
- 3
W
- 姉が勉強しているのを聞いて「カキクケコ、タチツ
テト」と言えるようになった。よく遊んでいる者ど
おしでは通じる。家ではよだれをたらすことは殆ど
ない。
- 遊びの中で臨床家がA児のつもりと違ったことをす
ると変な顔をしているが、抗議することなくそのま
まにしている。母がカキクケコ・タチツテトを言わ
せようとしたが嫌がって言わない。10分に1回くら
いよだれをたらす。
-
- 1
- この一週間ほどとてもよくおしゃべりをするように
- 初めに「シェンシェイ」と呼びかけ、その後メチャ

- 3
W
| になった。2つあるいは3つことばがつながる。お姉ちゃんたちと身振り手振りではなく話を通じている。母が答の例をいくつかあげていくと当否をはっきり答え、そういう形で話がわかるようになってきた。クチャことばで長く話しているかのようにしゃべる。途中ネェとかネという音を入れる。3語文が出る。問いかけに短いことばではっきり答え、会話が成りたつ。
-
- 3
W
| 一時も家にいない。仲の良い友だちができ、よく遊ぶ。姉をほめるととてもくやしがる。お手伝いをよくしたり、ほめられようとする。単語なら知らない人にもわかるくらいははっきり言える。長く続いたことばになるとわかりにくくなる。母は大抵わかる。負けず嫌いで1つ叩かれたら3つ叩き返さないと気が済まない。何事もそんな風。遊びは姉のあとをついて回っている。ホイッスルをピッピッピと吹いてみせるとすぐまねして同じ拍子で吹く。臨床家が遊びを楽しんでしていないとA児も楽しめない。
-
- 3
W
| 1週間ほどことばがはっきりしなくなったことがある。母が相手をするのが少なかったのもそのせいかもしれない。久しぶりに会った人から通じるようになったねと言われた。ここへ来るのを何より楽しみにしていて、「そんなことをすると連れていかないよ」と言うとピタと止める。「〇〇(自分の名)ネ、コップネ、キューッテ」という言い方で自分がコップを割ったことを報告する。こぐまちゃん絵本を自分で読むまねをする。知っている単語を言う。
-
- 3
W
| よくしゃべるようになった。子どもたちとよく会話している。友だちには何とか通じさせようと努力する。母からよりも姉や友だち遊びの中でことばを覚えるようである。母のことばのオーム返しはよくする。A児の言うことばで名詞は母にわかるが、動詞がわからないことがよくある。友だちからよだれをはやしたてられたことがありそれ以後自分でも気をつけている。臨床家がA児の指示と違ったようにすると怒った声を出して再度指示する。絵本をひろげてメチャクチャことばで読むかっこうをして楽しむ。メチャクチャことばの中に時々知っている単語を入れる。ストーリーを使って吹く遊びを自分からする。大人の意向を読んでそれに従おうとする様子が減ってきた。臨床家にすねてみせる。
-
- 1
M
| 家の者にはよくわかるが初めて会った人は聞き返す。一日でも過ごせばわかるようになる。同じ年齢の子どもとよく会話して遊ぶ。通じなくてかんしゃくを起こして戻ってくるのがなくなった。姉が本を読むのを聞いていてオーム返しをする。近所の年上の男の子につつかかかっていく。母の仕草、口調を恥ずかしいと思うくらいそっくりまねる。近所の子との遊びで主導権を握れることはない。臨床家から新しいことを誘うと不愉快そうな表情でのらない。ここでは自分が主導権を握るという様子をはっきり示す。
-
- よくしゃべる。相手にわかろうがわかるまいがペラペラしゃべる。人形をいっぱい出して1人で2役3役とってままごと遊びをする。TVでいじめられる場面では自分もこわがって泣き出す。感情をよく出す。姉が本を読むのを聞いていて知っている単語をオーム返しするがそういう単語が増えている。「ニャンコハアカチャン、ニャンコジャンイ、ネッコ! (にゃんこという言い方は赤ちゃんことばで間違い、猫と言いなさい。」「センセエダメネ」など感情をこめて言う。臨床家にはほんの一寸した身振りで自分の意志が通ずると考えている。本を読むまねをする時の外は Jargon がなくなる。
-
- 同じ年の子とよく遊ぶ。初めて会った子どもとそのとてもよくしゃべる。人の反応を気にすることなく

1
M
3
W

日のうちに友だちになり、幼稚園入園に対しいくらか気が楽になった。けんかの場面など早口で言わなければならない時、もつれて人に通じなくなる。新しく覚えたことばはきちんとと言えるが、昔から使っていた幼児語のほうがむしろ不明瞭。過去にあったことを報告した場合、母には全部わかるが父にはわからないこともある。自分の都合の悪いことは抜かして報告する。絵を切り抜いて紙芝居のようにしてお話をする。母、姉のことばのオーム返しをよくする。CM など TV でよく聞かれることばもよくまねる。口で負ければ手で向かっていく。幼稚園に対してはここへ来るのと同じに考えて楽しみにしている。同じことばが言えたり言えなかつたりすることが不思議である。気はとても強い。

一所懸命話しまくる。(平らになったよ, 1個)(魚のごはんです。)(できたよハイ, 食べるよ)などの文を話す。

友だちに対してもかなり自己主張ができるようになってきている様子から、幼稚園にも適応できるのではないかと思われたので、入園後は2・3か月の間をおいて経過観察を行うことにした。入園後の生活は母親の報告によると、初めのうち先生の指示を我が事として聞く態度が身につけていなかったこと、いわゆる“さばけた”子どもに強い調子でまくしたてられると気押されて引っこんでしまうらしいこと、そのことと関連して自分から友だちの仲間に入っていけないなどのことが多少の気か掛りとなっていたということであるが、一方園に行ってみるとそれなりに遊んでおり、先生にも積極的になつていき、そのうち仲の良い友だちもでき、小人数のグループなら自分から入っていくようになったということで、母親の心配もさほど深刻なものとはならず、外見上特に問題とするほどのことには気づかなかつた。家では近所の友だちや姉とけんかしながらよく遊び、おしゃべりし、理屈も言うようになり、年長組に上がる時には、園の新しい先生にも通じるようになっており、近所の人も家での母の行動を見ていてそれを話し皆わかってしまうほどおしゃべりをするようになったということであった。家庭でことばを言わせたり言い直させたりすると怒るが、正しいことばをかければオーム返しをし、そうすると正しい発音に近づく、またA児と同じ発音でしゃべると怒るということで、被刺激性が高く、通室時に母親には、表現しようとする意欲を損なわせないこと、おしゃべりをできるだけたくさんするように配慮すること、正しいことばを聞かせることを引き続いて心がけるよう指導した。看板の字などを自分からよく読んで欲しがり、格別教えたわけではないのにひらかなを自分で覚えてしまったとのことであった。就学前には自分の名まえを書くことができるようになり、発音も殆ど普通になり母親の心配は殆どないと言って良いくらい軽くなった。就学の数カ月前に父親が訪れ、A児はよく伸びているし園の先生からも心配ないと言われており安心な気持である一方A児が他の子どもと遊んでいるのを見るとまだ同じではなく、父親自身が(軽い)障害をもっており人一倍努力してきたので、自分の子にはそういう思いをさせたくない、と父親の気持を語られた。この時、臨床家の子どもとの接し方に少し甘すぎる点があると母親が感じているということを臨床家が知ることができた。幼稚園時代の当室のA児の様子は、話す文が次第に長くな

り、表現の仕方も巧みに育っていき就学前には園であったことを文で臨床家に報告するようになった。年少組の間はママ（だめ）、タアゴ（卵）、ゴーワン（象さん）チノー（昨日）ミヨリ（緑）などの誤りがあり、構音の誤りが一貫せず構音の未熟さがかなり残っていた。特に長い単語や文を口の中であいまいに言うと明瞭度が下がり聞きとれなくなった。被刺激性が高く、例えばままごと場面で、A児「メララミ」T（臨床家）「？」A「メララミツクル」T「あ、目玉焼き作るのね、さあ、目玉焼き作ろう」A「メララヤ△ノゴハンネ」T「目玉焼きのごはんつくるの」… A「メラマアイ」一時後には自分から「メラマラキ」と言う、という具合にその場で正しい音に近づき、就学前には明瞭度2くらい、10回に1回くらい聞きとれないことがある程度に成熟した。誤り方としては{j/r}が目立ち、{tʃi/kji}の誤りも時々みられたが一貫性はなかった。部屋へ入ってきて暫くの間、不安定さが感じられることが何回もあり、遊びの中でまず気持ちを思い切り解放させることを狙いとした。自分のことばについての自信のなさが感じられたが当室ではおしゃべりを楽しみ、何回かくり返し言って臨床家に通じない場合直接物をさし出すなど、コミュニケーションをあきらめることはなかった。CA6歳7カ月でPBTのPテスト6歳レベル6題中3題ができる。ままごとで人形に皿を配ったあと数えて足りないことがわかと（半分ずつするように）と指示して解決した。

年長組の時にことばの教室の検査があつてたいへん軽いのでそのまま良いと言われたとのことであった。

就学後の母親からの報告では、学校でとても大人しく発表もあまりしないという気掛かりはあったが、元気の良い時と沈んでいる時と波があり、暫くして友だちもでき、作文も書くことができるようになり特に問題となるほどのことに気づかなかつた。臨床場面ではたいへん活発で大きな声でよく話をしたが、担任の先生が見たら驚くであろうとのことであった。構音は徐々に成熟していたが作文の中で{j/r}の誤りをそのまま書いていること、そのままでは正しい音に聴覚的注意を向ける態度ができないであろうと思われたので、1学年の7月から聴覚的刺激と文字をマッチングさせる等の活動を取り入れた。それまでより頻度を多く1月に1回会うようにした。伝えたいことを自由に表現する表現力が不足しているのを本を読むことを励ました。このような活動をできるだけA児の興味に適うように具体的な教材を用意したが、臨床家の指示に従って活動すること自体がA児にとっては期待外で、誘うと「遊ぶ時間がなくなる」と文句を言ったこともあった。2年生になって注意すれば正しく構音することができるようになり、学校で担任が教科書を使って読みの検査をした時も数人が残されたにもかかわらずAは合格し、このことで自信を得たようであった。

考察：この事例は通室するようになってことばの面で急速に成長した。臨床開始後かなり早い時期に臨床家に対し強い精神的つながりをもつようになり臨床場面以外でもこの精神的なつながりがA児にとっては大きな意味をもっていたと考えられる。臨床場面では子どもがのびのびと楽しい時間を過ごせるようにするという基本方針を、やはりかなり早い時期から実現することができた。最近A児自身から当時のA児の心境を聞くことができたが、それによると、幼稚園、学校では人がこわくて仕方がなかった。従って殆ど話もしなかったとのことであった。また当時の臨床活動を行

なっていた部屋の建物の雰囲気もたいそうこわいと感じていたそうである。当時外見的には母親に気の強さを感じさせる面もあったが、基本的には不安を感じ易い子どもであり、幼稚園、学校では対人関係的に強い緊張があったと思われる。生育歴的に乳児期にできあがる母子の絆の強さが充分と言えないものであった可能性があるが、臨床家とのつながりによってその不十分さが補われ、安心して自己表出することができるようになり、その結果ことばの獲得へと向かったのではないかと考えられる。しかしながらこのようなつながりも、外的に問題とされるほどに表出されるまでには至らなかったが集団生活へ内的にも充分適応することを可能にするだけのものとはなっていなかったと考えられる。

事例 B 初診時5歳2カ月の男児で父母と2歳年上の姉との4人家族である。

主訴：発音が悪くて思っていることが充分相手に通じない。全体に遅れているようで就学後ついていけないかどうか心配である。か行、ら行、は行の音が言えない。

生育歴：新生児黄疸4日～20日。首のすわり、お坐り、這い這い、1人立ち、歩行開始は普通。2歳ころ昼間おしめがとれる。始語1歳2カ月、2語文3歳6カ月、ことばのことを心配し始めたのは2歳ころからで、当時は単語だけであった。2歳6カ月のころは何でも手まねで通じていた。姉に比べてめちゃくちゃことばがなかったが3歳ころになってするようになった。そのころから人に逆らうこともでてきた。4歳5カ月で幼稚園に入園、その後ことばが急に伸びてきた。よく転び、頭を打つことが多かった。赤ちゃんのころは姉と比べてたいそう大人しく、手のかからない子どもであった。

初診時：鼻風邪をひいていたが、話しことばは聞いていて時々わからないことばが入る程度（明瞭度2）。構音の誤り {t/k} {tj/} {r̄} {h̄} {ts̄}（一は省略、△は歪みを示す）一貫性がない。全体にゆっくりした重い構音の仕方。本人も多少ことばのことを意識している様子がみられた。歯が悪い。

最近の10カ月に急にことばが伸び始めたところで構音の未熟さが当然な面もあるので、母親に一般的なことばの一般的な指導法のガイダンスを行い、また遊びの中でできるだけ種々の擬音を出して遊ぶよう指導して様子を見ることにする。

初診より7カ月後母親より電話があり、2回目の面接。幼稚園でことばを人に笑われたことがあり、家でも母にもわからないことがある。父はもっとわからない。姉が一番よくわかる。ことばの数は増えており、長く続けて話すことができるようになってきている。母自身はあまり心配していなかったが幼稚園から気をつけるように言われて気になり始め、電話したとのことであった。

初診時に比べ {t/k} の構音に改善がみられないこと、父母の不安が大きくこのままでは子どもに心理的圧迫が加わる可能性が高いことから、以後原則として週一回の通室指導をすることにする。2回目の面接の時に家庭でガラガラうがいの水を徐々に減らして行って最終的に水無しで音をたてることを試みてもらうよう指示。

当室では、語音に注意する態度を育てること、聴覚的な刺激を受けること、聴覚的な語音弁別力を育てることを狙いとした活動を用意する。基本方針どおりB児がのびのびとくつろいだ気分で遊

表

欄は週	聞き分け練習 無記入は単音	〇誤り無	雑音	遊びの中の擬音	〔 〕省略△歪み () 内正しい日本語 構音の様子	⑩母親	⑪臨床家(Therapist)
2	カーガ		遊びの中で擬音をかけているとつられて出すことがある		ウサギ キレンジジャー [j, m] イッ(1)ニ(2)ツァン(3)チ(4)ト(5)ロツウ(6) チチ(7)ハチ(8)ツェ(9)	緊張して遊びにうちこめず声の量が少ない	
3	ギーイ, キーイ		首をおおむけにして空でうがい音を出す		タマネゲ/ギ [△] ウサギ [△] バナナ	あまり声を出さない ①が遊びを展開していくとつられて遊ぶ	
4	キーチ, ケーガ			●[gi]	ゴレンジジャーダヨ, ホラ	家庭で空のうがいは1回ずつしている	
5				●[[u, gi] [i, kij]]	キャベツ		
6	カーガ		①が空のうがい音を出して誘うと同じ音を出す, 区切ってみると[k]に近い			伝えたいことばがすつと出ず, 身振で補う	
7	キーギ ガーア						
8	キーチ カーガ		空のうがい音を区切って出してみる		①のあとについて「[kji, qi, gi]」を含んだ単語を言うとき初め注意している時はそれらしく聞こえるが気を弛めると歪む メリサンヒツジ1音1音区切って歌う ①のあとについて注意しながら単語を言うが[kji, qi, gi]		
9	キーギ				聞き分け練習の刺激を聞き返して[kji, ka]と正しく構成することがある		
10	無意味 2音節		ささや声でいびきのまね, 空咳を誘うとそれらしい音を出す		△ヒミツ		
11			いびきのまねで[k]に近い音を出す		ツバキ ウンテンジュタ/サン	短い単語をゆっくり言うときと明瞭	
12	単音〇		空のうがい音を出す ●[[u, pi]]			話し始める前に息を吸いこみ終るとため息をつく	
13	キーチーイ				カのつくものの絵カードを集めるように言うのとタマゴを入れる	初めてのなわとび練習：縄をおろすのと跳ぶタイミングが合わない。縄をおろしてから跳ぶように指導	

14												レットビュート、会話の中で [t] がしばしばそれらしく聞こえる
15												ホイッスルを吹いてみせ誘うとピーピーとゆっくりに吹き次第に速度を早めてピーピーと吹く
16												様々な擬音を出して遊ぶ なわとび1回ずつ区切るようにして20回跳べた
17												片足でふみこええる跳び方できるとびを続けてとぶことができる ゴム風船をふくらませようとしてウー
18												
19												
20												
21												
22												

就 学

⑩「ことばの教室で検査があり“舌の動きがのろい。長くかかるであろう、サ行がタ行になる」と言われた」

遊びの中で様々な擬音をいかにもそれらしく心地良く出す

⑩「ラ行音が下手だと思っていたが読ませてみたらわりとよく言えていた。ことばの数は増えている」

⑩「カとタが置きかわっているのが問題、身振に頼ることもあるが新しい言い回しをだいたい覚えていた」

カレー

動物の鳴き声で⑩が出して誘うとアヒルの時(ガア)にいびきのまね音を使う。

いびきのまねを誘う、初め長く続けて出し次に短かく区切るよう誘うととまどう

いびきのまねを誘うと [k] に近い音怪獣と誘うと [k] に近い音を出す

自分の奥で [k] に近い音を出して遊ぶ
自分からいびきの音を出して遊ぶ
聞き分け練習の刺激音をくり返す時チとキが一貫しない。意識的に構音して却ってキがティになる
日常会話で [ka/a ko/to] 誤りが目立ち他はあまり気にならない。

日常会話で [ka/a ko/to] 誤りが目立ち他はあまり気にならない。

日常会話で [ka/a ko/to] 誤りが目立ち他はあまり気にならない。

日常会話で [ka/a ko/to] 誤りが目立ち他はあまり気にならない。

日常会話で [ka/a ko/to] 誤りが目立ち他はあまり気にならない。

23	<p>キ一チ 無意味 3音節 キ一チ 2音節 キ一チ 単音</p>	うが、い、いびきのまね、短かく切って出すことができる。	指人形を使って猿の鳴きまね、キヤッキヤ、キイーが言える	㊦「ことばの数が憎え、長いことばで学校であったことなど話をしてくれる、たいへんおしゃべり」
24		いびきのまねで「k」㊦が短かく出して誘うと同じように出せる	猿の鳴きまねしてごらんと誘うととまどろ。指人形をもつて「キヤ一」と言う	
25	キ一チ 単音	うが、い、いびきのまね、長くのびたり短かく切ったりかなり自由にできる		
26		うが、い、いびきの短い音「k」を㊦が言って誘うと一瞬止まるが同じ音を出す		不安定さが感じられる
27	キ一チ 2音節 キ一チ 3音節 キ一チ 単音	うが、い、いびきの音を短かく切って聞かせて誘うと㊦よりゆっくると言う		
28			猿の鳴き声を上手だねとほめて誘うと初め正しく言えていたのが次第に「t」の音が入る	
29		うが、い、いびきの音を㊦と交互に出しながら軽くなる	レイ (0) キノウモオトトイモ	紙風船をふくらませたらカ行が完全なタでなく歪んでいる
30		いびきのまね、ゆっくりに出すと空咳の音が出る	キンヨービ、言い情そうらにヒヤク (100) サン(3)ン(4)自発的に㊦のあとに「kji」と言っているが終り近く注意して言って「ti」になる	
31	キ一チ 各々の連続音		ゾウ、アヒル	
32	キ一チ	㊦のあとについて「ka」を出す	イチ(1)ニ(2)サン(3)ン(4)ゴ(5)ロツ(6)ヒチ(7)ハチ(8)クウ(9) ヤギ ヤキ	

33	キーチ							
34			①のあとについてうがいのまね長く出したり短かく出したり続けたり自由	キリン, ラッパ①のあとについてサラダ, マリ, ココロ?				
35	無意味 2 音節		①のあとについて [k] を続けて出せる	キョーワオモシロロカッタ キュウ(9)				なわとびゆっくくりであるがリズムをとって24回続く
36	無意味 4 音節○単語○		[k] 10回出す	ツウ(9) カヤツテナニ? 新しく覚えた長い単語は不明瞭				
37	○		+	カ行ガ行音はその音の前で一瞬止まり意識してゆっくくり言うが歪んでいることが多い				
38	キーチ 4 音節		[k] 10回出す	イノシン 日常会話でキとギが言えていることが多い				
39	キーチ 誤り1/18		+	日常会話の明瞭度 1-2				家でなわとびが4回, 早く続けてできたとってしてみせる
40			+	①のあとについてドハン(ご飯)と言いつぐ自分で [k] を出してハンと続ける。				㊸「家でなわとび6回続いた。カキクケコを言わせてみたら言えた」
41	○ コート		[ka] 有声で5回 [ko] " 4回	①のあとについてドハンすぐ [k-] ハン テルテルポージュ キャッキヤ, {tsu/ku} [te/ke]				㊸「このごろ家ではよくしぎべる。カとコがはつきり言えるようになった。学校で言わない」
42	キ 文中から 見つける		[ko] 有声8回 自分で次第に小さな音にしてみる	①のあとについてコ・ハン, コー・ヒー, カメ				㊸「学校で発表するようになったらいい」

43	○ 	コート 単語○	[ka] [ke]	コハトと言う前に一瞬止まる。コイス, サトウ, ヒクイチチチ(基地)タタイ(高い)	コハトと言う前に一瞬止まる。コイス, サトウ, ヒクイチチチ(基地)タタイ(高い)	
44		 単語	[ko]	大きな声, 無声, 自分で変和させる	ミジカイ	㊟「オ・カーサン」とカの前で一瞬つまる。言えるようになって嬉しう
45	○ 	クーツ ○	[ko]	大きい声, 小さい声, 高い声, ささやき声自由に出してみ	日常生活で「ka」「kji」「ko」危げなく言える。長い単語はたどたどしい言い方になる カイジュニーノヒコキー, ガイユツ	言いたい単語がずっと出てこないことがある ㊟「カ行をまぢがうことつまることなくなつた」
46	○ 	○ケータ 単語	[kji] [ko]		コーチャ, カミノケ, ケイト パイロットハットハッジン自分で試すように8回くらくらくくり返し言ってみる	
47	カータ 文	文	[ke]		イチガツニジュエローロクニチ (1月26日)	
48	キージ ○	文	[ku] ko	聞こえることがある	△△ ゴトゴンゴトン	
49	ガーカ 単語○	文○	[ka] 10回		キューリップ (チューリップ)	
50		ゴーコ	[ka] 4回 [go] 6回		イチ(1)=(2)サン(3)ン(4)ゴ(5)ロク(6)アからノまで五十音を正しく言う, キューリップ問い返すとチューリップ	訥弁の話し方。日常のことはスラッと表現する「de」以外ほぼ成熱㊟「作文を学校で読みたがらない」

ぶことのできる機会を作りことばへの警戒心を除き、雑音を出す機会としても役立つことにする。当面の改善の目標音として、それらしい音が出ており発達的にも早い時期に習得される [kji] を選んだ。

表に各回に行った音の聞き分け練習と構音の変化を示す。直接構音の改善を旨とした活動としてこの表に載せたものの他に毎回カルタに類する遊びと、回によって絵カードを見ながら臨床家のあとについて単語を言う活動を入れた。カルタや聞き分け練習では、臨床家にそのつもりはなかったが、B児が自然に刺激音をくり返すということがしばしばみられた。

ストローを使って吹く遊びでは息の調節が上手にできていた。巻取は2本同時に吹くことができる。初めての時は紙風船にうまく息を吹きこむことができなかったが5カ月時にはふくらますことができるようになった。遊びに夢中になっていて、特に下を向いている時よだれがでることが時々みられた。

歌を歌うことは好きで、臨床家と母親を前にしてマイクを持って歌い自分の歌を毎回録音した。通室を始めてから1カ月半ほどの間は歌と関係ある人形や絵カードなど一寸したきっかけにもすぐ歌い始めた。カセットがかかっているとその歌のテンポについていけず途中で黙ってしまう。1音1音ははっきり発音しながらゆっくりしたテンポで歌う。

人形、積木、ミニカー等を使って闘いの場面を空想して遊ぶのに夢中になる。TVマンガのヒーローの人形を使って怪獣や悪者をやっつける。自宅からロボットを持参してその遊びに加えることもあった。2回に1回はこの遊びをし、この遊びをしない時でもこの遊びに使うためにTVヒーローの絵を画いて切り抜いたり、武器を作ったり関係ある活動をするが多かった。臨床家はB児が身振り手振り動作擬音で演じている場面をそばで見ているずっと実況放送風に描写していくことをした。B児はそのことを期待していて途中で止めると臨床家の方を見て待ったり、臨床家がB児のつもりと違うことを言うと活動を止めて自分でその間違いを言い直した。空想場面の人形の役をとって台詞を言うことは数場面しかみられなかったが、擬音ををよく出していた。臨床家が人形を動かしてB児の持っている人形と闘いそうになると避けた。この遊びの時は空想場面に夢中でひたりこみ、時々傍で見ている母親に気づいてはっと我に返り、どうして良いかわからない様子で母親にかけ寄ったことも2、3回あった。最後までこの遊びは続いたが1年ほど過ぎたところでは闘いそのものよりもそれに使うロボットをレゴで作ったり怪獣を粘土で作ったり、それまでと少し違う闘い方に見たりということの方に興味移ったようであった。

このような空想場面にひたり込む遊びと別に、臨床家や臨床家の持っている人形をからかったり驚かせたりして声をあげて笑った。人が大げさに反応してみせるとどうしようもないように笑いころげ、くり返し同じことをして働きかけた。紙風船をつく遊びもおかしくてたまらないようによく笑った。

通室の早い時期から、遊べる時間、帰らなければならない時間のことを度々気にした。来室してすぐに帰る時間を母親に告げたり構音のための活動時間が長くなりそうになると「遊ぶ時間がなく

なる」と文句を言った。1度B児からもう少し遊んでいたいと母親と臨床家に頼むことがあったが延ばしても帰る時間のことが気になってしまって遊びに打ち込めずすぐ止めた。だだをこねたり、何となく遊びを止めないで時間を引き延ばすということはせず、とても聞き分けが良い。

母親は、B児の“のろさ”のことを気にしており、リズムをとる場合にいつも人よりワンテンポ遅れてしまうこと、行動にさっととりかかれぬなどのことがしばしば話題に上った。オルガン教室での様子を見ていて、他の人が1回で覚えることを5回で覚えるのだから努力次第だと考えたと言ったこともあった。

考察：構音の改善の様子をみると、継続して聞き分け練習をしていた[kj]とその他の[k]音と比べて、[kj] [gi]の方がいくらか早く日常生活に定着したという程度である。[r] [j]については格別な活動をせずに学習がなされている。これには成熟による学習と聴覚的刺激や聞き分け練習の効果が広がったと2つの考え方ができる。ここでは双方の要因が働いていたと考えられる。[k]については空うがい音からB児自身が自分で日常会話へ広げ定着させていった。B児自身にとって言えるという自覚が喜びであった。B児は軽い中枢性の運動障害の徴候をいくつか示しているがこのような子どもは構音を含めて運動の形成に人一倍集中力を必要とする。同時に母親がしばしばとりあげたようにその“のろさ”によって人の印象や実際生活面で損をしがちである。当室での自由遊び活動はB児の精神衛生面に大きな効果をもっていたと思われる。

事例C 初診時4歳2カ月の男児で母と2歳年上の兄と一歳年下の弟の4人暮らしである。

主訴：おはなしができない。

生育歴：這い這い、歩行開始などの点で問題はなかった。誕生前は大人しく手のかからない子どもで近所の人からも赤ちゃんがいるとは思えないと言われた。1歳ころマンマ、パパと始語、1歳過ぎるといたずらをよくするようになりTVの歌に合わせてよく声を出していた。2歳のころ家庭に問題があって母親が動揺していた。そのころまではことばの心配はしていなかった。2歳3カ月の時大阪から鹿児島へ転居。小さい時“たかいたかい”をすると顔が真青になり体を震わせていた。すべり台もこわがった。しばらくして平気になった。3歳ころになってことばが遅いと思った。そのころと現在ではあまり変化がない。弟はことばを言い聞かせるとオーム返しをするのにそういうことがなかった。今もあまりない。変わった癖としてごはんを口に入れたまま呑みこまないでじっとしていることがある。

初診時の様子：(母親からの情報) 言えることばは単語が1から10の間。1音ずつ言わせる子と言えるが3音つながるとはっきりしなくなる。ことばを言わせようとするといやがる。こちらの言っていることは全てわかる。TVを見て内容を身振りと言で母親に伝えようとする。

(当室での様子) 水の中で泳ぐものはどれ? 等の簡単な文の理解ができる。絵を見てその物の名を尋ねると指さしし、声を出して何らかの反応をするが途中でその本の頁を次々にめくって行ってしまふ。絵を見て身振りとその絵の説明をする。プラレールを使って空想的な遊びを展開し、その中ではよく擬音を出している。傍で同じ音をより日本語音に近い音でかけているとC児の音もその

音に近づく。人と一緒に遊ぶこと、ことばに関しての警戒心が感じられる。たまたま同室に子どもが1人いてC児の使っていた玩具を欲しがるとその様子を見て自分の使わないものを渡す。

初診時母親の緊張が高かったのであまり質問することを控えた。以後2週に1回面接指導。経過を3期に分けて示す。

I 期 臨床家との関係がゆっくり進展し、ことばはあまり伸びなかった時期

初診～12回 (ほぼ半年間)

毎回兄弟3人とも訪れるが臨床家がC児に関心をもっていることを敏感に察し、近づこうとすると緊張する様子を見せるので、できるだけ3人に同じように接することにした。3人の遊びが別なので他の1人に関わるとC児の様子を見ることができないこともあった。傍でその場のC児の動きにあった声をかけるとオーム返しをする。4回目の時に抱き上げて“ぐるぐる回し”をしてやるととても喜び、面白いことがあると嬉しそうな表情で人の顔を見、共感を求める様子がでてくる。5回目臨床場面で初めて「ネコ、ココ」と2つことばをつなげる。人が「キャンデー」と言ったのに対し「メ(あめ)」と訂正したりなど、いくらか自分を出し始める。8回目には遠くにある積木を臨床家に取りに行かせたり、Jargon 様の声を出すようになった。単語の語尾だけを言うことが多く、自分の意志は巧みな身振動作で表現し、その巧みさはたいていの人に理解されうるだろうと思われた。12回目に初めてのびのびしたふざける様子を見せる。

母親の話では、1と月ほどはあまり変化がなく、そのころ気に入った絵本ができて、その中ででてくる調子の良いくり返し文を喜んで何回も読んでもらいたがるようになった。大きな声を出すようになり、2カ月過ぎると弟が母親のオーム返しをするのを聞いてC児もするようになる。3カ月くらいから本を読んでほしがるようになり、長いことばを使って話しかけるようになり、母親が勤を働かせたりC児が身振りで補ったりして何とか通ずるようになる。4カ月くらい経ったころあいさつをよくするようになり、明瞭度は低いが母にはわかることばが増えおしゃべりをよくする。友だちや兄とは通じなくてもしゃべりよく遊ぶ。時々はっとするようなことを言うことがあるが、もう1回言ってごらんとやると言わない、という変化がことばに関してのみみられた。初診時にはかくれんぼのルールがわからない状態であったが1と月後にはできるようになる。それまで兄とけんかすると泣いていたがしつこく向かっていくようになる。3カ月過ぎ兄の後をついて歩いて遊ぶ。ことばのことを言われながらも友だちとよく遊ぶ。気に入らない子には攻撃をすることもでてきた。アメ玉はたいていかむか出してしまう。ガムをかまない。通室するころから甘え、かまって欲しがるようになり、添寝してほしがたり抱っこして欲しがるといふ様子が3カ月ほど続いた。母親もできるだけ身体接触を増やし相手をすることを心がけたが、体の具合を悪くしたり家で仕事を始めたり弟がやきもちをやいたり、でなかなか思うに任せなかった、とのことであった。

II 期 ことばが伸び始めた時期

13回～19回 (ほぼ半年間)

臨床場面でいくらか緊張が下がってきたが完全には解けていない。

13回目、PBTのPテストを誘うと初め尻ごみしたが1つできると自分から次々するようになる。じっくりすればできると思われるものも一寸つまずくと止めてしまうという風であった。不明瞭だが「コンナノカンタン」「ヘイヘイ」という調子の良い声を出す。6歳レベル6問中2問7歳レベル15問中8問が解けた。14回目、中にネェと呼びかけるような調子のことばを混ぜながら相手に通じなくてもかまわずJargonを話す。19回目に初診時より長い文で絵本の中の物を尋ねるとことばで答える。構音の誤り $\{r\}$ $\{ts\}$ $\{d/r\}$ $\{t/s\}$ 。活動の中で自分の活動にあわせて「ココ（これはここに置く）」「メ」「テ」（絵を画きながら）などのおしゃべりをするようになる。明瞭度3、状況がわかるとわかる。自分に問われたのでない質問に横から口を出して答えたりことばに関する恐れがかなり減ってきた。

この期は父親の帰宅とともに始まる。母親の話によると2歳ころは父を嫌がっていたのに今回は喜んでついて回り、自分からつついたりして積極的に相手をして欲しがるようになった。遠方の仕事先に帰った父に長距離電話でメチャクチャことばで話をした。母からみて急におしゃべりをするようになったと感じられる。兄の口調をまねる、数字を10まで書ける、ひらかなをうつしたりすることをできるようになる。ガムをかむのが上手になる。語彙が増え長く続けて言うようになり、近所の人からもずい分おしゃべりするようになったねと言われた。TVの歌手の身振りやずっこけるまねをよくする。父親と一緒に生活する見通しがたって4月に幼稚園年長組に入園。19回目に会った時には、幼稚園には楽しそうに通っており、母親としてもここ半年ほどの成長ぶりに気が楽になったとのことであった。

Ⅲ期 ことばが順調に伸び、心配がなくなった時期

20回～22回（夏休み過ぎから、3月まで）

20回目に臨床家が会った時それまでよりずっと子どもっぽい幼い印象を受けた。

「あれを画こうっと」「やっぱし止めた」「じは点々が2つあるよ」などの文を話す。[tsu] [ji] が言えていることがある。全体に1音1音ゆっくりていねいに構音する。イントネーションが鹿児島方言になる。虫のことを自分で「ミチ、ミチ…ムシ」と言い直す。2カ月後おどけた身振で「ピンポンパーン、こちら局ですがー」と言ったり「象の仲間ね、青でも良いんだよ」と文を話す。キレンジャーという語の場合には[r]が正しく言える。ゆっくりした話し方で明瞭度2と3の間くらい。最終回時の3月末には、明瞭度が1と2の間くらいに上がっており、よくおしゃべりし、多少おかしい表現をした時でも横で適切な言い方を言ってみせるとそれを聞いて自分から言い直し、C児もたいへん安定し、ことばにも自信をもった様子であった。夏休み後しばらく母親がことばのリズムの乱れを気にしたこともあったがすぐに直った。ひらかなが読め、自分の名まえが書け、ことばもよく通じるようになり、友だちとけんかもできるようになったということで、就学を遅らせることを考えたこともあったが、就学させることにする、話しことばについてはもう心配がないと思っている、ということで終結した。

考察：A児同様ほぼ1年半の間に1語文から文章を話すまでに成長している。A児とは逆に臨床期間の3分の1を過ぎるころから獲得の速度が徐々にあがり、幼稚園の後半に加速度がついたように成長した。この速度はC児の情緒的な状態と平行し、情緒的な状態の改善の方がやや先んじて進行している。对人的に自己主張するよりも、巧みに人間関係上のトラブルを避けているところがうかがえた。C児は兄弟中でも特に母親の情緒に直接影響されやすい子どもである。母親ははっきりとは語らなかつたが自身も言語障害をもっていること（おそらくことばのリズムの乱れ）を臨床を開始してしばらく経ってから述べ、もともと緊張の高い人柄であると思われるが、また当時緊張の高い状態にもいた。初診時に比べ2回目以降は臨床家に対し次第に打ち解けた様子を見せるようになった。その後家庭の状態が回復した（C児が在園中に父親が鹿児島に転居）ことで母親の緊張がかなり和らいだと思われるが、この母親の情緒的な改善がC児に最も大きな影響を及ぼしたものである。臨床家との関係ではA児に比べてなかなかつろぐことができなかつたが、幼稚園入園後の集団への適応はC児の方が良い。幼稚園自体の差も考慮しなければならないが、家庭的基盤がしっかりしたことは大きな力があったと思われる。

考 察

A) ことばの獲得に必要な人的環境

子どもがことばを獲得するためには、子どもが心から気を許し、気がねなくのびのと自己表出をすることのできる人的環境が必要である。

これは子どもの側にいる人のあり方によってもたらされるものであり、また人によってしか与えることのできないものである。人が実際にしなければならないことは、子どもと子どもの生活の中に示されるあらゆる手掛りをもとに子どもが何を求めているかを推察し、それを受け入れ認めて実現し、かなえさせてやることである。またこの時忘れてならないのは、大人がその活動をする事自体を不快に感じていてはならない。このような配慮は一般に母親が乳児に与える配慮と同質の配慮である。乳児期の母子関係が何らかの形で言語発達に影響を及ぼしていることはホスピタリズムの研究等によっても明らかであると言える。

田口は、ことばを初めとする正常な発達全体の土台として緊密な母子関係を基盤とする基本的情緒の安定が不可欠であることを主張し、ことばに遅れのある子どもについて臨床仮説を提案し検証している。

従来でもこの子どもの情緒的安定という問題は遊戯療法の取り入れ、母親カウンセリングの必要性など一応触れられてきてはいるが、言語治療領域では現在でもなおその重要性が認識されないまま放置されているように感じられる。これは次に挙げるような理由で、必要な人的環境を真に実現することが容易でなく、臨床状況でなかなか効果が上がらないこともしばしばあり、そのためこのアプローチそのものがその子どもに適合しない、即ちことばの獲得がうまくいかないのは子ども側の条件に不備がある、という判断に結びつけられがちなものも一因しているように思われる。

容易でない理由の1つに、このような人的環境を実現するためには細かな手掛かりを見逃さない

注意力や判断力だけでなく、殆ど勘に近いような直観を働かさなければならない場合があるということが挙げられよう。アクスラインによるディブスの治療やダンブローズによるローラの治療はこのような事情をよく物語っている。問題が重く、自己表出が押えられている子どもほど得られる手掛かりが少なく、子どもによっては逆の手掛かりを大人に示す場合すらあり、相当な注意が必要となる。第2に、子どもが求めているものがわかっていてもそれをすぐに充分与えられない場合もある。実際にできないことでも空想場面を使って必要なことを実現できる場合もあるが“高い高い”や“ぐるぐる回し”のように直接子ども自身が身体的に体験しなければならないような種類のことがある。このような身体を使っての遊びは、大人の身体的頑健さがなければ困難である。第3に、大人の示す感情的サインに対する子どもの知覚力が高くなっていて、大人がその活動を不快がっていることに気づき、そのために子どもが気を許せずにいる場合もある。子どもはことばが未発達なだけ大人の非言語的サインを敏感に読みとっているが、一般に人はこのようなサインを無意識に表出しており統制することはそれほど容易ではない。このようなサインに対する感受性も子どもによってかなり個人差があるが、場合によっては大人が必要なサインをかなり意識的に身体表現することが必要な場合もある。

今ここに述べたような活動は単に子どもをしたいようにさせておくというものではなく、甘やかしてではない。子どもが真に求めているものを与える愛情ともいえるものである。おそらく子どもがそのようにして求めている体験は発達上実際に必要なものであろうと想像される。

子どもは自由に自己表出ができる環境を人から与えられることによって、情緒が安定し、そこで周囲の言語環境を生かしてことばを獲得していくことが可能になるものと考えられる。

B) 現代における母親

A) で述べたような議論はしばしば問題の母親起因説、あるいは母親への批難と解釈されることがあるが、これは決して問題の根本的な原因が母親にあることを意味しているものではない。

1つは、近年の母子研究が明らかにしてきているように、正常な母親が正常な育児行動をするのに必要な子どもの側の表出が乳児期に欠けていたということであり、もう1つはやはり様々な面が指摘されていることであるが、母親が生きている社会的状況の影響があるように思われる。

子どもの年齢が高くなるにつれて、母親は就学その他の現在社会にある枠ぐみを意識するようになり、このような意識は臨床状況ではよくあることであるが母親に葛藤を引き起こす。現代の社会には、このような問題をもった子どもの母親だけでなく一般に子どもがごく小さいうちから目の前の子どもを私的個人的にでなく、より広い社会的な立場に立って眺めることを促すような状況がある。マスコミによって大量の育児に関する情報が毎日家庭に注ぎこまれるだけでなく、健診事業など社会制度の発達によって同年齢の子どもたちの平均、標準、一般状態などの知識を得る。

また、母親自身の学歴や社会参加によって、一般的に社会の側から個人に要求されるものについての感覚も養われてきている。これらは一面たいへん有益であって、決して後退的に解決するべきものではないが、一面で母親の子どもに対する最も個人的な反応を押え、先に述べたような子ども

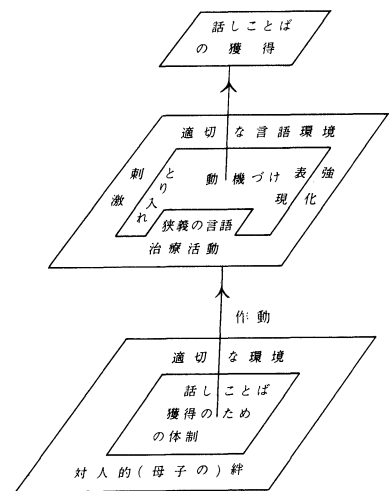
が気を許して自己表出できるような環境を自然に作ることに對し一種の抑制的な働きをもたらしている一面があるように感じられる。筆者の臨床的な印象であるが、近年子どもが心から喜ぶ表情をみて心配のうちにも一瞬顔をほころばせるという反応が母親のうちに弱くなっているように感じられる。このような母親と話をしてみると、子どもを注意深く観察しており、子どもに必要と思われることは実行する意志をもちまた実際実行しており、決して冷たい母親ではないが、ただ子どもの情緒的側面に注意を向けることが欠けている。このような母親に知識として情緒面の重要性を説いても、子どもに対する反応が知識に基づいたものとして、特に敏感な子どもはそれが母親の自然な反応でないことを察してしまふ。臨床的に事態を改善するためには、母親の緊張をゆるめ、個人的な反応を回復することを手助けすることが必要なように思われる。

ま と め

話しことばの獲得には、直接ことばそのものに関わる環境と別に、子ども自身のもつことばの獲得体制が作動できるような人間的な環境を用意しておくことが必要であると思われる。(図)

このような環境は、従来家庭において主として母親が用意してきたものであるが、現代には母親が社会的観点と個人的観点との間に立って葛藤を生じ易い状況がある。

特にこのような葛藤の激しくなり易い臨床状況では、母親の緊張を低め、個人的な反応を回復させるような手助けが必要であると思われる。



参 考 文 献

- 1) Brazelton, T.B. 小林登訳 ブラゼルトンの親と子のきずな—アタッチメントを育てるとは— 医歯薬出版 1984
- 2) 堀口申作編 聴覚言語障害 医歯薬出版 1980
- 3) 今井邦彦編 言語障害と言語理論 大修館 1979
- 4) Johnson, W. 他 田口恒夫訳 教室の言語障害児 日本文化科学社 1974
- 5) 小嶋謙四郎 乳児期の母子関係 第2版 アタッチメントの発達 1981
- 6) Mowrer, D 他 伊藤元信訳 言語治療の理論と実際 1984
- 7) 永淵正昭 言語障害概説 大修館 1985
- 8) Perkins, W.H. 佃一郎他訳 言語病理学 1979
- 9) Ribblee, M.A. 津守真他訳 乳児の精神衛生 法政大学出版局刊 1975
- 10) 田口恒夫(編) 言語発達の病理 医学書院 1970
- 11) 田口恒夫(編) 言語発達の臨床 第1集 光生館 1974
- 12) 田口恒夫(編) 言語発達の臨床 第2集 光生館 1976
- 13) 田口恒夫・牧田和子(編) 言語発達の遅れ, 言語障害児教育の実際シリーズ③. 日本文化科学社 1981
- 14) Tinbergen, N. 他田口恒夫訳 自閉症文明社会への行動学的アプローチ— 新書館 1976
- 15) Tinbergen, N. 他 Autistic Children—new hope for cure George Allen & Urwin